

3-2

「読解力」と「学びの基礎力」 「社会的実践力」との関係

ベネッセ教育研究開発センター 小林 洋

はじめに

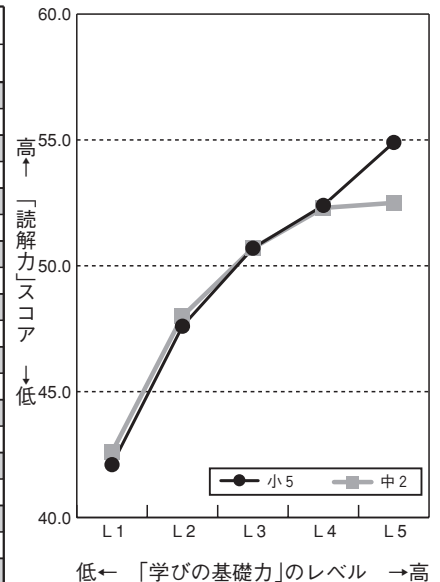
本章前節での「読解力」と教科学力との関係の分析に続き、本節では、「読解力」と「学びの基礎力」ならびに「社会的実践力(生きる力)」との関係を調べ、本調査の基本仮説の一つである「『読解力』は、教科学力、学びの基礎力、社会的実践力の合成学力として発現する」という仮説の検証を行うことが中心テーマである。「学びの基礎力」や「社会的実践力」の項目への子どもの具体的な回答状況については、本調査の中間報告書(資料編)を参照していただきたい(ベネッセ教育研究開発センターのWebサイトで参照可能となっている)。

1 「学びの基礎力」が高い子どもほど「読解力」が高い

図表3-2-1および図表3-2-2は、それぞれ「読解力」と「学びの基礎力」との関係、「読解力」と「社会的実践力」との関係を示すものである。

図表3-2-1 「読解力」と「学びの基礎力」との関係

	設 問	群	「読解力」スコア(偏差値)	
			小5生	中2生
豊かな基礎体験	自分の考えや気持ちを理解してくれる友だちがいる。	肯定	50.4	50.3
		否定	48.0	47.9
	家族は自分のことを気にかけてくれていると思う。	肯定	50.5	50.5
		否定	46.6	47.3
学校の先生は、自分のことを認めてくれていると思う。	肯定	51.3	51.4	
	否定	47.5	47.8	
学びに向かう力	学習していて、おもしろい、楽しいと思うことがある。	肯定	51.1	51.0
		否定	47.4	48.2
	学習して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う。	肯定	50.7	50.5
		否定	44.6	48.7
	努力すれば、自分もたいていのことはできると思う。	肯定	50.5	50.2
		否定	46.9	48.9
ものごとを最後までやりとげて、うれしかった事がある。	肯定	50.6	50.5	
	否定	45.4	46.4	
自ら学ぶ力	自分で勉強の計画を立てている。	肯定	51.5	51.3
		否定	48.3	49.1
	授業で習ったことはそのままおぼえるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。	肯定	52.4	52.2
		否定	47.6	47.7
	授業で習ったことを、自分なりにわかりやすくまとめている。	肯定	52.1	51.6
		否定	47.6	48.3
宿題はきちんとやっている。	肯定	51.1	51.3	
	否定	44.1	46.2	
学びを律する力	興味を持ったことを、自分から進んで勉強している。	肯定	51.0	50.7
		否定	47.9	48.9
	わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している。	肯定	51.6	52.4
		否定	47.4	47.5
人の話は最後まで、きちんと聞いている。	肯定	50.9	50.7	
	否定	47.4	48.0	
熱心に授業を受けている。	肯定	51.7	51.4	
	否定	47.1	47.3	



「学びの基礎力」のレベルは、左の表にある設問の回答合計に基づき、上位から7%、24%、38%、24%、7%の割合に準ずる形でL5からL1の5段階を設定している。「社会的実践力」についても同様。

図表3-2-1の表中の設問項目は、「学びの基礎力」の4領域に関わる設問のうち、「読解力」との間の相関が顕著な項目を抽出したものである。各項目で「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答したものを肯定群、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答したものを否定群として、2群に分け、両群の「読解力」スコア(偏差値換算)を比較している。この表中に現われている両群の差は、すべて統計的に1%水準で有意となっている。この表で、両群で5ポイント以上の差が生じているものを見ると、小5では、「宿題をきちんとやっている」「学習で身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う(学習の役立ち感)」「ものごとを最後までやりとげてうれしかったことがある(達成経験)」という項目で、それぞれ7.0、6.1、5.2ポイントの差となっている。中2では、「宿題」の他には5ポイント以上の差があるものはないが、「わからないことはそのままにせず、わかるまで努力する」や「授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方

もいっしょに理解しようとしている」という項目などで4ポイント以上の差を示している。また、小5と中2の間で、両群の差異の大きさに最も大きな違いが現われているのは、「学習の役立ち感」の項目で、小5-中2=4.3ポイントとなっている。

図表3-2-1の右側のグラフは、子ども一人ひとりの表中の設問の回答合計を5つの段階にレベル分けし、そのレベルと「読解力」スコアとの関係を示したものである。中2では、L4→L5で頭打ちになる傾向が現われているが、全体として表中の各設問の「読解力」スコアへの寄与が累積的に積み上がっていることがわかる。

(なお、本調査では、項目数の制約により、「学びの基礎力」の項目は、絞り込まれており、とくに「豊かな基礎体験」の領域では、下位カテゴリーの「他者との支え合い」を中心とした項目となっており、基本的な生活習慣の確立に関わる項目や社会体験や文化的体験は含まれていないことに注意してほしい。)

2 「社会的実践力」が高い子どもほど「読解力」が高い

図表3-2-2は、同様に「社会的実践力(生きる力)」について見たものである。「学びの基礎力」と同様に、「社会的実践力」の各項目の肯定群と否定群との間に全般に統計的に有意な差が生まれている。両群の間の偏差値に5ポイント以上の差異があるものを見てみると、小5・中2で共通しているのは「自分の力をできるだけ伸ばしたい」という成長意欲を示す項目であり、小5で5.1、中2で6.0ポイントの差が現われている。その他にも、小5では、「自分の意見の誤りに気づいたときには、素直に取り下げることができる」(5.8)、中2では、「自分と違う意見も大切にしている」(5.8)で5ポイント以上の差があるものとなっている。また、「調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる」「筋道立てて、ものごとを考えることができる」「調べたことを、コンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる」といった問題解決的な力に関わる項目についても、小5・中2で共通して、4ポイント以上の差異が現われている。小5と中2の間で、両群の差異の大き

さに最も大きな違いが現われているのは、小5<中2となる項目では、「どんな仕事が自分に向いているかを知っている」という自分の適性理解(自己理解)に関わる項目であり、中2-小5=3.6ポイント、反対に、小5>中2となる項目では、「自分の意見や考えの誤りに気づいたときには素直に取り下げることができる」という心の柔軟さ・素直さを示す項目で、両学年の差異の差は同じく3.6ポイントとなっている。これらの2つの項目は、いずれの学年においても「読解力」は、「肯定群」>「否定群」となっており、「読解力」向上に影響を及ぼしていると考えられるものであるが、どちらかと言えば、「自分の適性理解(自己理解)」は小5よりも中2段階で、「心の柔軟さ・素直さ」は中2よりも小5段階で、「読解力」向上とより関わりが大きい項目であることがうかがえる。

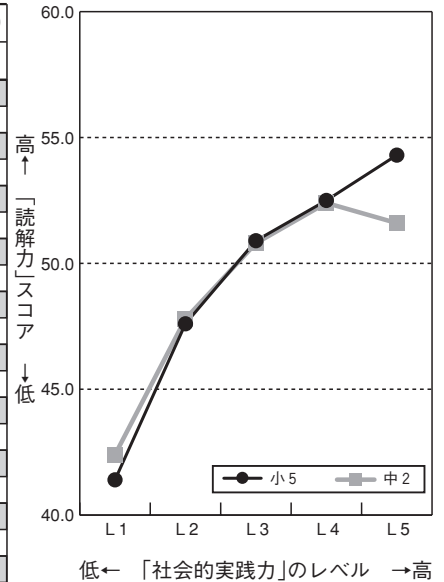
なお、この「心の柔軟さ・素直さ」は、達成経験や自己肯定感を問う項目と相関があり、気の弱さというよりも、ある程度自信に裏付けられた態度であることがわかっている。

図表3-2-2の右側のグラフは、図表3-2-1の右側のグラフと同様に、子どもの「社会的実践力」を5つの段階にレベル分けして「読解力」スコアとの関係を示したものである。中2では、L4→L5で、むしろ「読解力」が低下する傾向が現われているが、小5では、レベルが高くなるほど「読解力」は向上しており、表中の各設問の「読解力」スコアへの寄与が累積的に積み上がっていることがわかる。中2で、「読解力」スコアがL4→L5で低

下する理由は解釈が必ずしも簡単ではない。前回の調査では、「社会的実践力(生きる力)」のレベルと教科総合スコアとの関係で、小4・小6・中3の3つの学年のうち、小6で同様な傾向が現われた。一つの解釈としては、小6～中2段階では、自己評価の力(姿勢)が一時的であれ後退し、アンケート調査に対しても真面目に記入できないような子どもが他の学年に比べてやや増えることを反映した現象かもしれない。

図表3-2-2 「読解力」と「社会的実践力」との関係

	設 問	群	「読解力」スコア(偏差値)	
			小5生	中2生
問題 解決力	調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる。	肯定	52.0	51.9
		否定	47.2	47.4
	筋道を立てて、ものごとを考えることができる。	肯定	52.1	52.1
		否定	47.6	47.6
	さまざまな角度からものごとを考えることができる。	肯定	52.2	51.8
		否定	48.3	48.5
	自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。	肯定	52.0	51.7
否定		48.1	48.6	
筋道のはっきりとしたわかりやすい文章を書くことができる。	肯定	51.8	52.3	
	否定	48.2	48.7	
調べたことを、コンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる。	肯定	52.1	52.3	
	否定	47.8	48.1	
社会的 実践力	テレビのニュースや新聞などを見て、世の中のできごとをよく知っている。	肯定	51.3	50.9
		否定	47.4	48.4
社会で問題になっていることについて、どうすればよいかを考えたことがある。	肯定	51.8	51.4	
	否定	48.3	49.0	
豊かな心	自分がやらなければならないことは、責任を持ってやりぬくことができる。	肯定	51.3	51.1
		否定	47.1	46.9
	むずかしいことでも、失敗をおそれないで取り組んでいる。	肯定	51.1	50.9
		否定	48.3	48.9
	自分とちがう意見も大切にしている。	肯定	51.9	51.9
否定	47.3	46.1		
自己 成長力	自分の意見や考えの誤りに気づいた時には素直に取り下げることができる。	肯定	51.7	51.0
		否定	45.9	48.8
	どんな仕事が自分に適しているのかを知っている。	肯定	50.5	51.3
		否定	49.7	46.9
自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う。	肯定	50.5	50.4	
	否定	45.4	44.4	
	自分は、周りの人から認められていると思う。	肯定	51.5	51.5
否定	47.9	48.3		

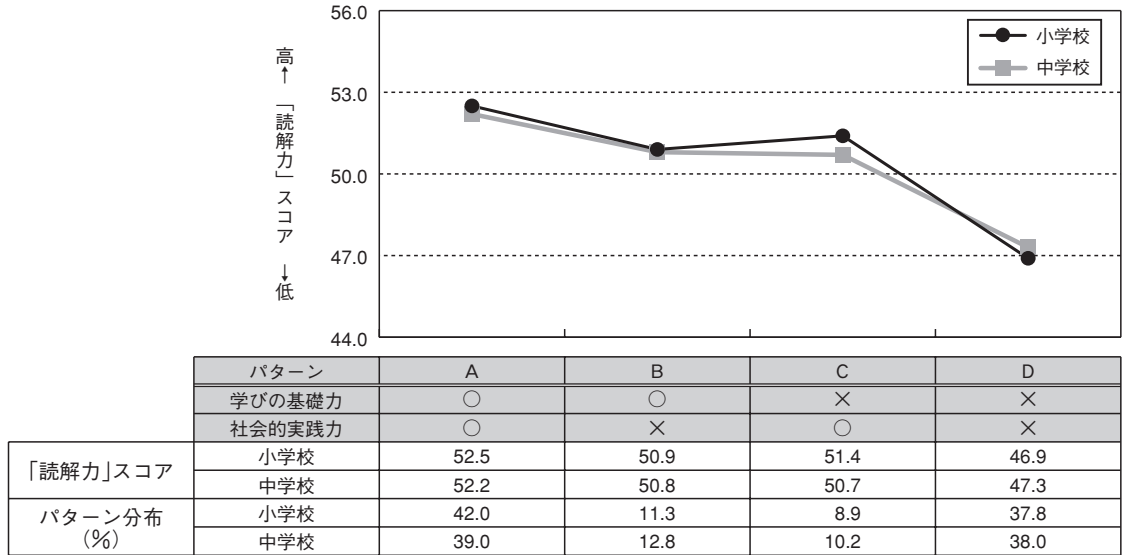


中2生では、L4→L5で、「読解力」スコアの低下が見られるが、全体として「学びの基礎力」の場合と同様な関係が見られる。

3 総合学力のバロメーターとしての「読解力」

図表3-2-3は、「学びの基礎力」と「社会的実践力」のパターンと「読解力」スコアとの関係を示したものである。

図表3-2-3 「学びの基礎力」「社会的実践力」のパターンと「読解力」との関係(小5)



(○：平均以上・×：平均未満)

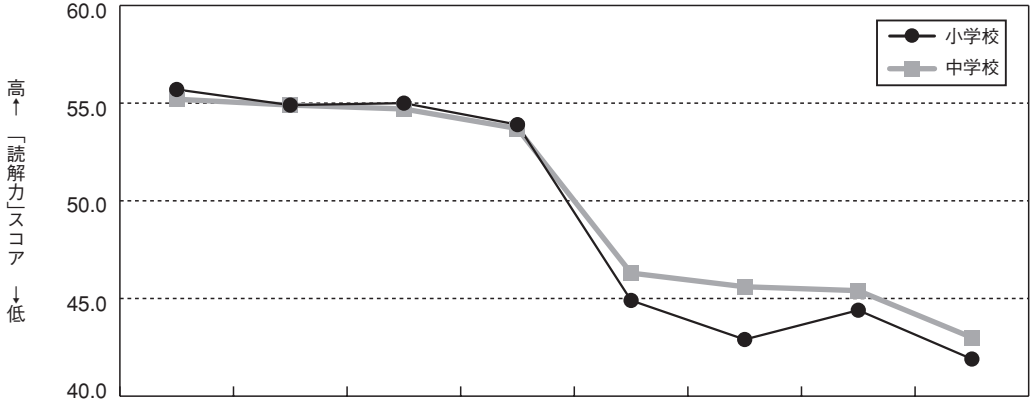
「読解力」は、「学びの基礎力」「社会的実践力」ともに平均以上のパターンAのグループで最も高く、いずれも平均未満のパターンDのグループで最も低くなっている。この2つのグループの「読解力」スコア(偏差値)の差異は、小5で5.6、中2で4.9となっている。「学びの基礎力」や「社会的実践力」は、バランスよく育成されることが「読解力」向上にとっても有効であることがわかる。

図表3-2-4は、図表3-2-3にさらに教科学力を加えて、「総合学力」のパターンと「読解力」との関係を見たものである。「教科総合」は、国語と算数/数学の2教科のスコアの平均をとったものである。この図表から、「読解力」は総合学力が全体として高いパターンAで最も高く、総合学力が全体的に低いパターンHで最も低いことがわかる。この2つのパターンの間では、「読解力」のスコア(偏差値)に、小5で13.8、中2で12.2の差異が生じている。このように、総合学力が高いほど「読解力」は高いという関係が明らかにできたことにより、本調査の基本仮説の一つである「『読解力』は、教科学力、学びの基礎力、社会的実践力の合成学力として発現する」という仮説の検証は目処が立ったと言える。

しかし、図表3-2-4を見ると、教科学力の平均以上のパターン(A~D)と平均未満のパターン(E~H)との「読解力」には顕著な開きが認められ、相関係数を取ってみるまでもなく、教科学力と「読解力」との関係が他の2つとの関係よりも非常に強いことが見て取れる。この傾向は、中2よりも小5でより顕著であることがわかる。本章前節でも分析されているように、「読解力」向上にとって教科学力の向上はやはり重要な課題なのである。

ただし、このことは、「学びの基礎力」や「社会的実践力」の育成が、「読解力」向上にとって取るに足らないと考えることは早計である。なぜなら、教科学力自体が、「学びの基礎力」や「社会的実践力」と相互に関係し合い規定し合う側面があることが、前々回の調査で検証されているからである。また、図表3-2-4から読み取れるように、「学びの基礎力」と「社会的実践力」は全体として、教科学力が平均以上のグループの中では「読解力」スコア(偏差値)で2ポイント弱、教科学力が平均未満のグループの中では3ポイント程度ではあるが、独自の寄与をしていることも見逃してはならないだろう。

図表3-2-4 総合学力のパターンと「読解力」との関係



パターン		A	B	C	D	E	F	G	H
総合学力の パターン	教科総合	○	○	○	○	×	×	×	×
	学びの基礎力	○	○	×	×	○	○	×	×
	社会的実践力	○	×	○	×	○	×	○	×
「読解力」スコア	小学校	55.7	54.9	55.0	53.9	44.9	42.9	44.4	41.9
	中学校	55.2	54.9	54.7	53.7	46.3	45.6	45.4	43.0
パターン分布	小学校	29.5	7.4	5.4	15.5	12.3	4.0	3.4	22.7
	中学校	25.6	7.6	5.4	15.4	13.1	4.8	5.3	22.9

(○：平均以上・×：平均未満)

図表3-2-5 「読解力」と各学力との相関係数

	小5	中2
教科総合	0.75	0.67
学びの基礎力(全体)	0.28	0.24
豊かな基礎体験	0.04	0.03
学びに向かう力	0.26	0.19
自ら学ぶ力	0.30	0.26
学びを律する力	0.28	0.24
社会的実践力(全体)	0.31	0.24
問題解決力	0.34	0.30
社会参画力	0.24	0.15
豊かな心	0.27	0.22
自己成長力	0.19	0.09

図表3-2-5は、「読解力」と各学力との相関係数を学年別に一覧にしたものである。

「学びの基礎力」と「社会的実践力」については、下位の領域別にも示している(この表中の相関係数に対しては、無相関仮説の棄却の検定を行った結果、すべて統計的に有意となっている)。小5・中2ともに、「教科総合」との相関係数が他と比べて圧倒的に高い数値になっていることは、上の図表3-2-4に現われている状況と対応している。

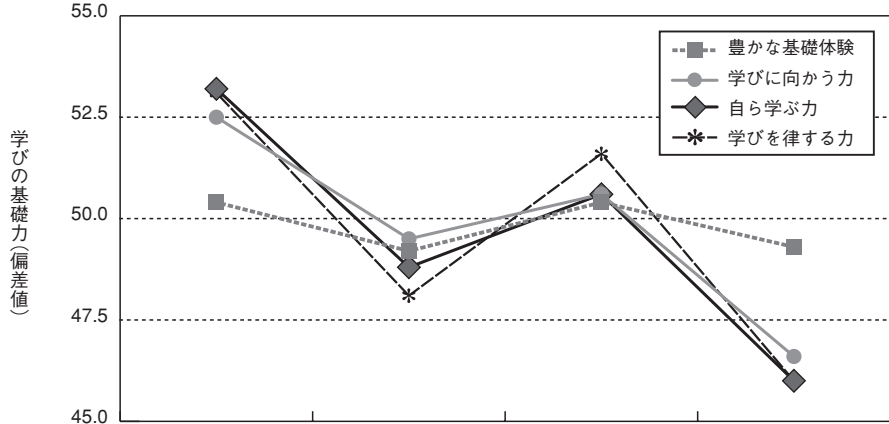
また、「学びの基礎力」「社会的実践力」について、領域別の相関係数を見ると、小5・中2ともに、「学びの基礎力」については「自ら学ぶ力」、「社会的実践力」については「問題解決力」との相関が最も強く現われている。この傾向は、前々回の調査で、「教科総合」と、「学びの基礎力」「社会的実践力」各領域との関係で明らかにされた傾向と一致している。

4 「読解力」「教科学力」のパターンと「学びの基礎力」「社会的実践力」との関係

図表3-2-6と図表3-2-7は、小5について、「読解力」と「教科学力」(教科総合)のパターンと、「学びの基礎力」各領域との関係、ならびに「社会的実践力」各領域との関係をそれぞれ示した

ものである。また、図表3-2-8は、「読解力」と「教科学力」の成績の4つのパターンに属する子どもの「読解力」3観点別等の平均スコア(偏差値)を示したものである。

図表3-2-6 「読解力」「教科学力」のパターンと「学びの基礎力」との関係(小5)



パターン	1	2	3	4
読解力	○	○	×	×
教科総合(国十算)	○	×	○	×
学びの基礎力	52.3	48.9	50.8	46.9
豊かな基礎体験	50.4	49.2	50.4	49.3
学びに向かう力	52.5	49.5	50.6	46.6
自ら学ぶ力	53.2	48.8	50.6	46.0
学びを律する力	53.1	48.1	51.6	46.0
パターン分布(%)	45.3	8.9	14.4	31.4

先に、次ページ下の図表3-2-8について見ておくと、「読解力」、教科学力が、ともに平均以上のパターン1の割合が最も多く、次いで、ともに平均未満のパターン4となっている。注目すべきは、パターン2とパターン3の違いであり、パターン2(○×)の割合は、パターン3(×○)の半分程度にすぎない。「読解力」スコアは平均以上だが、教科学力(教科総合)は平均未満というパターン2が1割に満たない最も少ない割合であることは、教科学力の支えなくして、「読解力」向上は成立しにくいことを示している。また、パターン3の存在は、教科学力は平均以上であっても、そのことが必ずしも自動的に「読解力」向上には結びつかないことを示唆している。これらのことから、「読解力」は、教科学力を前提的な基盤として成立する学力であり、教科学力よりも「高次の学力」という側面を有していると言えよう。しかし、むしろこのことは、「読解力」と教科学力との関係が、教科学力→「読解力」という一方通行的なものであることを意味せず、「読解力」が教科学力に影響を与え牽引する場合も考えられ、両者は相互に作用し合い影響を及ぼし合う関係にあると見るべきである。

う。

図表3-2-8について、もう少し詳しくみておくと、パターン1(○○)とパターン2(○×)の間で、「読解力」の3観点で最も大きな違いが生じているのは、「情報の取り出し」である。このパターン間での3観点の差異の大きさは、「情報の取り出し」(4.1) > 「解釈」(1.3) > 「熟考・評価」(1.0)の関係となっている。「読解力」にとっての背景的な力となる教科学力の弱さが、まず「情報の取り出し」のところに現われていると見ることができる。

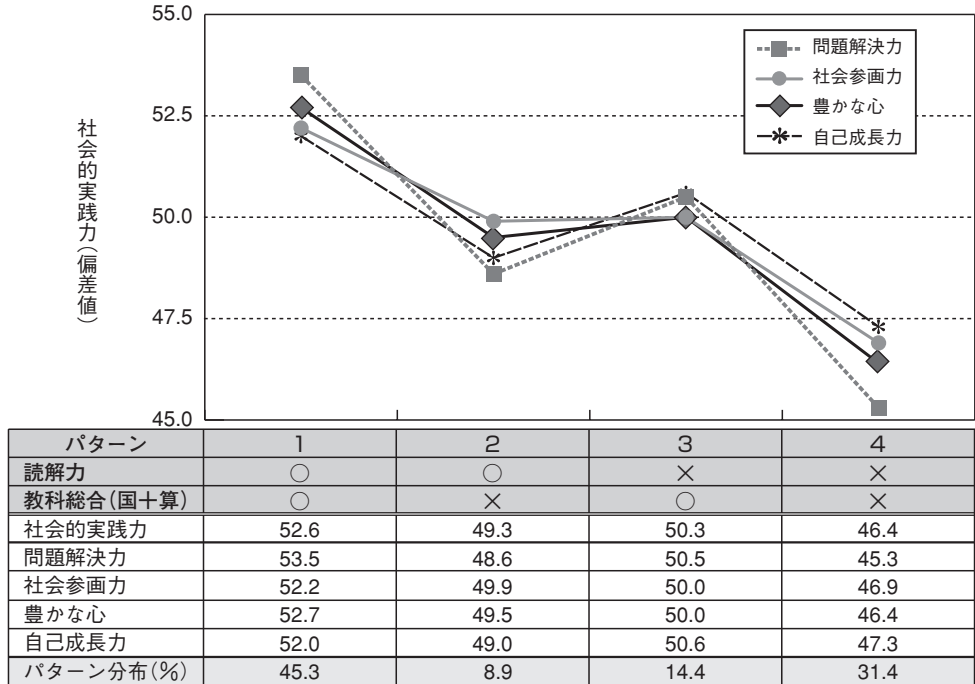
また、ともに教科学力は平均以上というパターン1とパターン3との間では、3観点の差異の関係は、「情報の取り出し」(10.4) > 「熟考・評価」(9.4) > 「解釈」(7.3)となっている。このことは、教科学力は平均以上であるのに、「読解力」が低い子どもに対しては、「情報の取り出し」のスキルを高めるとともに、テキストの内容を理解するだけでなく、熟考し、評価する力、すなわち「あなたならどう考えるか？」と自分自身の意見・考えを持たせ育てていくような指導が有効であることを示していると考えられる。

1 教科学力が平均以上で「読解力」が低い子どもは、「自ら学ぶ力」に課題がある

さて、前ページの図表3-2-6に転じると、まず、「学びの基礎力」の「豊かな基礎体験」以外の3つの領域のスコアが、パターン1(〇〇)で最も高く、パターン4(××)で最も低いという関係となっている。また、パターン1とパターン3とを比べてみると、「学びの基礎力」の各領域の差異は、「自ら学ぶ力」(2.6)＝「学びに向かう力」(1.9)＝「学

びを律する力」(1.5)＝「豊かな基礎体験」(0.0)となっている。「学びの基礎力」の面から見れば、教科学力は平均以上であるにもかかわらず、「読解力」が高い子どもとそうでない子どもの違いは、主に「自ら学ぶ力」の領域にあると言える(具体的な項目については、次ページの図表3-2-9参照)。

図表3-2-7 「読解力」「教科学力」のパターンと「社会的実践力」との関係(小5)



図表3-2-8 「読解力」「教科学力」のパターン別スコア

	読解力	教科総合	割合(%)	読解力(偏差値)				教科総合
				全体	情報の取り出し	解釈	熟考・評価	
パターン1	〇	〇	45.0	57.7	56.6	55.9	56.5	56.5
パターン2	〇	×	8.9	55.0	52.5	54.6	55.5	45.9
パターン3	×	〇	14.5	46.6	46.2	48.6	47.1	54.2
パターン4	×	×	31.6	39.4	41.8	41.3	40.8	40.4

教科学力が平均以上で「読解力」が低い子どもは、「問題解決力」に課題がある

次に、前ページの図表3-2-7で「読解力」「教科学力」のパターンと「社会的実践力」との関係を見よう。まず、「社会的実践力」の4つの領域のスコアがすべて、パターン1(〇〇)で最も高く、パターン4(××)で最も低いという関係となっていることが見て取れる。「学びの基礎力」の場合と同様に、パターン1とパターン3に注目すると、「社会的実践力」の4領域の差異の両パターン間での違いは、「問題解決力」(3.0) > 「豊かな心」(2.7) > 「社会参画力」(2.2) > 「自己成長力」(1.4)となっている。「社会的実践力」の面では、教科学力は平均以

上であるにもかかわらず、「読解力」が高い子どもとそうでない子どもの違いは、第一に「問題解決力」の領域にあり、次いで「豊かな心」の領域にあると言える。

これらの領域について、2つのパターンの間で回答に顕著な差が出ている主な項目を、前述した「学びの基礎力」についても合わせて、図表3-2-9に一覧にしている。教科学力は平均以上でありながら、「読解力」の低い子どもの「読解力」向上のための指導を考える際のヒントを提供するものである。

図表3-2-9 「読解力」が平均以上と平均未満のグループ(教科学力はともに平均以上)の間で差異の大きい「学びの基礎力」と「社会的実践力」の項目(小5)

	領域	設問内容	パターン1	パターン3
学びの基礎力	学びに向かう力	学習していて、おもしろい、楽しいと思うことがある。	60.2	51.8
	自ら学ぶ力	授業で習ったことを、自分なりにわかりやすくまとめている。	46.4	36.4
		授業で習ったことはそのままおぼえるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。	45.1	33.6
		授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている。	40.6	33.0
		興味を持ったことを、自分から進んで勉強している。	55.7	47.7
	学びを律する力	わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している。	51.8	45.4
熱心に授業を受けている。		48.6	41.8	
社会的実践力	問題解決力	調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる。	47.2	37.6
		筋道を立てて、ものごとを考えることができる。	40.1	32.0
		さまざまな角度からものごとを考えることができる。	34.7	26.9
		自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。	37.9	29.2
	豊かな心	むずかしいことでも、失敗をおそれないで取り組んでいる。	46.7	38.8
		いつも新しいアイデアを考えたり、工夫したりしている。	43.7	33.2
	社会参画力	社会で問題になっていることについて、どうすればよいかを考えたことがある。	41.3	33.1

教科学力はともに平均以上で、「読解力」が平均以上のパターン1と平均未満のパターン3の子どもの各設問の回答について2つのパターン間で回答の違いが大きいものを示す。数値は、肯定指数(とてもあてはまる%+0.5×まああてはまる%)を表す。

3 「読解力」、教科学力ともに低い子どもの場合

これまで、主に教科学力がともに平均以上のパターン1とパターン3に注目してきたが、「読解力」、教科学力がともに低く、多くは「学びの基礎力」「社会的実践力」もすべて低いパターン4に属する子どもたちの「読解力」向上への指導はどう考えたらよいであろうか(図表3-2-6と図表3-2-7のパターン4に属する子どものすべてが、「学びの基礎力」「社会的実践力」のいずれも低いとは限らないが、図表3-2-4から、このような子どもたちが小5・中2ともに2割強存在していることがわかる(パターンH))。この子どもたちの「読解力」向上に向けてたどるべき基本的な目標パスとしては、パターン4→パターン3→パターン1と進んでいくことが考えられよう。パターン4→パターン2→パターン1というパスも、やや成立しにくいと

考えられるが不可能ということではない。こちらは、どちらかと言えば「読解力」が教科学力の向上を牽引していくパターンである。しかし、パターン4の子どもを伸ばしていくためには、いずれにしても、今回の調査では含まれていない基本的な生活習慣の確立(や社会体験・文化的体験の充実など)を含めて、「学びの基礎力」「社会的実践力」の各領域の力をともに育み伸ばしていく多面的な働きかけが求められ、そのことなくして「読解力」向上に至ることは難しいということを今回のデータは示している。

以上は小5について見てきたものであるが、中2についてもほぼ同様にあてはまることを付記しておく。

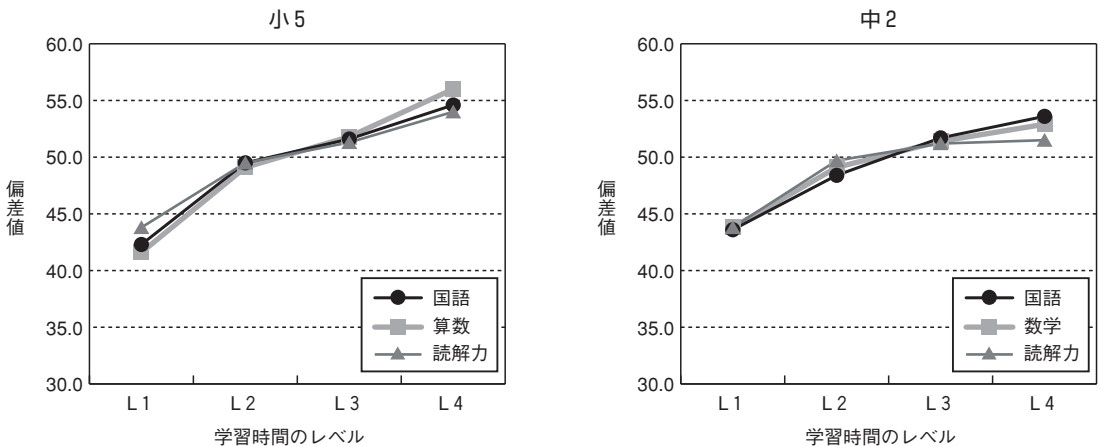
5 「読解力」と学習時間との関係

本節の最後に、「読解力」等と学習時間との関係を見ておこう。

図表3-2-10は、校外での学習時間のレベルと「読解力」や国語・算数/数学のスコアとの関係を学年別に見たものである。「学習時間のレベル」は、一日の学習時間の選択肢「1：ほとんどしない、2：30分～1時間くらい、3：1時間30分以上、

4：2時間30分以上」の平日と休日それぞれについての回答スコアを合計し、L1：2、L2：3～5、L3：6～7、L4：8の4段階で示したものである。したがって、L1は、「平日も休日もほとんどしない」、L4は、「平日も休日も2時間30分以上」、L2とL3はその中間に該当する。

図表3-2-10 学習時間のレベルと「読解力」「教科学力」との関係



「学習時間のレベル」については、本文参照。

この図表から、小5では、「読解力」や教科学力ともに、学習時間が増えるにしたがって、その成績は高くなるという関係が顕著に現われているが、中2では、国語や数学は、小5と同様に学習時間が増えるにしたがって伸び続ける傾向が認められるものの、「読解力」についてはL1→L2で急に上昇し、それ以降、頭打ちとなる傾向が見て取れる。

第2章2節で述べられているように、今回の「読解力」の調査問題は、できるだけ教科の知識に直接左右されないような素材が選ばれているが、それでも小5段階の子どもにとって文章の意味を汲み取る国語の力やグラフを読み取る算数の力など

教科の基礎的な力に支えられて初めて回答できるという意味合いが強い(すなわち、教科学力との相関が強い)のに対して、中2段階では、教科の学力に規定される部分よりも、問題の意味を汲み取った上(「認識」した上)での「思考力」「表出力」が「読解力」のスコアを規定する度合いが相対的に高まっていると考えられる。言い換えるならば、中2段階の教科の学習は、現状では、「読解力」で必要とされるような「思考力」や「表出力」の向上に十分に貢献していると言えないということである。学習の時間は、必ずしも増やせば増やすだけよいということではなく、その「質」が問われているのである。

以上の分析全体を通して明らかになった「読解力」が高い子どもの特徴的なプロフィールをまとめておこう。

「読解力」が高い子どもの特徴的なプロフィール

「学びの基礎力」について

- 豊かな基礎体験 ①家族や友人、教師との良好な信頼関係ができています。
- 学びに向かう力 ②知的好奇心や感性が豊かで、学習の楽しさやおもしろさを感じている。
③学習の役立ちや大切さを積極的に認めている。
④物事をやり遂げた経験や喜びを味わっている。
- 自ら学ぶ力 ⑤繰り返しだけでなく、関連させて覚えるという方略も取り入れている。
⑥学習の計画やめあてを持って取り組んでいる。
⑦家庭での学習時間を確保し、宿題をきちんとやっている。
- 学びを律する力 ⑧分からない事はそのままだにせず、分かるまでがんばっている。
⑨学校の授業を大切にしている。

「社会的実践力」について

- 問題解決力 ①筋道を立てて、かつ、多角的に物事を考え、自分なりの意見を持っている。
②調べたことや考えたことを適切な手段で表現している。
- 社会参画力 ③社会に対する関心が高く、自分なりの貢献の在り方を考えている。
- 豊かな心 ④自分に与えられた課題は、きちんと責任を持ってやり遂げている。
⑤難しいことにも失敗を恐れず挑戦する積極性を持っている。
⑥自分と異なる意見も尊重し、協調しながら物事に取り組んでいる。
⑦自分の誤りに気づいたときには素直に訂正する柔軟性がある。
- 自己成長力 ⑧自分の力を伸ばしたいという意志と目標を持っている。

「教科学力」について

- ①教科学力は高いが、「自ら学ぶ力」などの学びの基礎力や「問題解決力」などの社会的実践力もともに高い。
(教科学力が高い子どもが「読解力」も高いとは限らない。)

「学習時間」について

- ①平日、休日ともに2時間半以上学習している (小5)。
(中2では、学習時間が長いほど「読解力」も高いとは限らない。)

「読書活動」について ※)

- 本のジャンル ①文学だけでなく、多様なジャンルの本を幅広く読んでいる。
- 読書量 ②1ヶ月に5冊から10冊程度読んでいる。
- 本の読み方・読後の活動 ③教科書や調べた資料を要約したり、自分の意見を書いて発表したりしている。
④教科書や読んだ本の文書を、根拠や理由を示しながら批評し合っている。
⑤テーマを決めて、詳しく調べたり、考えたりしている。
⑥お互いの発表内容をきちんと批評し合い、高め合っている。

※)「『読書活動』について」は、第4章の“Special View”を参照。